

外国人研究者による日本人顔貌のタイプ

吉岡 郁夫

はじめに

明治の日本人起源論は、モース、シーボルト、ミルンらによって始められ、主に考古学および民族学的資料に基づいて立論された。これらの諸説にも、わずかながら形質人類学的な資料が使われているが、本格的な形質人類学による日本人種論は、ベルツが最初である。

ベルツは明治一六年(一八八三)、生体計測、生体観察、頭骨の研究から、日本人の形質を説いた著書『Die Körperlichen Eigenschaften der Japaner』を発表した。そのなかで、彼は日本人の顔貌に地域差のあることに注目し、それを長州型と薩摩型に分けたことはよく知られている。^(一)しかし、それより前に、二、三の外国人研究者によって、日本人顔貌の地域差について発表されていることは、これまで論じられていない。

ベルツの日本人起源論

鎖国を解いて間もないころの日本および日本人は、欧米人研究者の興味の対象であつて、日本人の起源について多く

の説があつた。日本人の構成要素としては、蒙古人種、マレー人種、アイヌなどが、それぞれ単独で、あるいは二つ以上混じっていると考えられ、これらの要素のうち、アイヌだけは多くの支持を得ていた。

ベルツは、アイヌを別とすると、日本民族には、二つのまったく異なるタイプがある、と説いている。

第一のタイプ（長州型）は上流階級によく見られるもので、「優美ともいえるくらい華奢な体つき、長頭、細長い顔、つり上った眼、ほどよく中高の鼻、小さい口などを特徴とし」ている。第二のタイプ（薩摩型）は普通庶民の間に見られるタイプで、「ずんぐりとがっちりした体格、短頭、幅広く寸づまりの顔、いちじるしく張っている頬骨、あまりつり上らない眼、低い鼻、大きな口などの特徴」がある、としている。

第一のタイプは蒙古人的顔貌とはかけ離れているが、中国の上流階級の特徴を示している。第二のタイプはマレー人を思わせる。

しかし、黄色の皮膚、剛直毛、まばらなひげ、少ない体毛、短頭もしくはそれに近い頭型、著しく突出した頬骨などは、蒙古人とマレー人に共通している。蒙古人とマレー人とを対比させた誤りは、蒙古人をアジア大陸で日本に最も近くにいる中国人ととつたためである。中国人といっても、必ずしも一様ではなく、種々雑多な蒙古種族から構成されている。

このようにして、ベルツは、蒙古種族の異なる二つの民族が時代を異にして二回、日本に侵入したと考え、「第一回は東から朝鮮を経て渡来し、第二回は東もしくはそれを上まわる種族が南から来た」と推定している。南といっても、インドネシアやインドシナを考える必要はなく、日本までの自然の道はいつも朝鮮を経由していた。

一方、南方から台湾や琉球を経て渡来した可能性も否定できない。琉球の人々は朝鮮人と非常によく似ている。「琉球人の特徴は、黄褐色ないし褐色の顔色、長い顔、厚いが長く、やや中高の鼻で示され、日本人やおそらく朝鮮人より鬚が濃い」。このような理由で、マレー人移住の足場として、琉球は除外しなければならない。すると、大規模な移住は朝

鮮經由以外には考えられない。

第一回の移住者は第一のタイプであり、第二回に來たのはおそらく第二のタイプであろう。古事記の神話からみて、最初の侵入地は出雲であったと考えられる。出雲に国家が建設された後、第二回の渡來者が九州に移住し、主に薩摩一帯に集中的に行われた。

すなわち、日本人の中には、アイヌ的要素は少なく、蒙古系の二要素の占める割合が大きい。北方蒙古系は出雲に上陸した後、本州一円に広がり、現在出雲、長門地方にその痕跡がみられるので、長州型と呼ばれる。南方蒙古系は九州に上陸し、次いで本州に渡って日本全土を征服し、日本の王朝を設立した。この種族は日本人全体の中で占める割合が最も大きく、薩摩型と呼ばれ、現在なお薩摩一帯に最も純粹な形で残っている、と結論している。

ベルツ以前の外国人研究者による日本人形質論

ベルツの日本人種論が、その後の日本人類学に与えた影響はきわめて大きい。これは彼が東京帝国大学で教鞭をとり、彼の学説が日本人研究者の間に広く知られていたからではあるが、日本人を長州型と薩摩型とに分類したのは、彼の独創といえるだろうか。ベルツ以前に発表された日本人論から、日本人の形質に関する説を見ることにしよう。

日本人の形質についての記載が見えるのは、シーボルトの論文である。彼は『考古説略』のなかで、次のような日本人起源論を述べている。日本人は土着の民族ではなく、おそらく中国か朝鮮あたりでしだいに混血してきたのだろう。薩摩の人を見ると、琉球人と朝鮮人との混血であることが明らかである。また、畿内と北越の住民とを区別することができるのは、混血の程度によって差を生じたからである。⁽¹¹⁾

彼の説は英文『日本考古学』になると、さらに明確になる。彼は日本や周辺地域の習俗を比較して、次のように述べている。⁽¹²⁾

……こんにちの日本人のなかに奇妙なことだが、付近の島々やアジア大陸のある地域に見られるような様式が各地に存在する。たとえば九州の人は地理的に朝鮮や琉球に近いので、彼地の人びとと多くの類似点があるし、いっぽう西の方ではアイヌの人たちと類似することが多い。(関・関川記)

次いで、明治一三年(一八八〇)、奄美大島へ海産動物の採集に出かけたドイツ人動物学者デーデルラインは、その島の住民に二つのタイプがあることを記している^(四)。その一つはおそらく本来の日本人で、主に薩摩から琉球に渡来したのである。もう一つのタイプは成人男子にはつきり現れており、本来の大島人である。彼らは少し華奢であり、顔はさほど広くなく、顎が尖り、本来の日本人のような上顎の突出はない。唇は薄い。鼻根は深くくぼんでおらず、鼻背はまっすぐで、出ているといつてよい。眼が大きく、著しい多毛である。しかし、女性には、日本人女性のような真平らな顔はないが、両者の間にはあまり差がない。

この二型は島全域に平均に分布し、島民の大部分は二つのタイプの混血とみるべきである。本来の大島人のタイプは日本南部、九州に最も多いといわれるが、琉球および日本での収集資料が不足している、と結論を保留している。

工学寮(東京大学工学部の前身)で地質学・鉱山学を講じていたイギリス人ミルンは、一八八二年の論文に、シーボルトとデーデルラインの論文を引用し、日本人に二つのタイプがあることを主張している。薩摩には、丸顔、大きな眼、やや毛の多いタイプがあり、彼らはおそらく原住民と関係があるだろう。これとは別に、長い卵円形の顔、著しく斜めになった眼、やや鷲のような鼻を持ったタイプがある。彼は前者を原住民タイプ、後者を貴族的タイプと呼び、奄美の住民を、アイヌとパプア人とをつなぐミッシングリングの一つと考えた。そして、日本人の祖先は朝鮮から来たことを示唆し、「まだ薩摩に彼らの古い言葉が残されている可能性がある」と述べている^(五)。

アイヌは古い時代にパプア人がニューギニアからフィリピンを経て日本に移住し、北方ではコロポクグルと接した^(六)。フィリピン、台湾ではマレー族が渡来した。すなわち、ミルンは、琉球人が多毛であること、女性が手背に入墨をする

ことなどから、アイヌと琉球人の類似を強調し、アイヌのいた日本本土がモンゴロイドやマレー族の祖先によって侵略され、「破られた領土……で残ったものはすべて——アイヌ、エータ（フィリピン）、台湾および大島の原住民のように、かつては多少とも連続した線であったものの破片である」という。彼の考えに従うと、アイヌの居住地が日本人によって分断され、南の琉球人と北のアイヌとに分かれたことになる。

考察とまとめ

以上の説をまとめてみると、以下のようになる。このうち、デーデルラインの二型は奄美大島住民のみの観察であるから、他の報告者の二型とは対応しない。

日本人の顔貌にいくつかのタイプがあることを記載したのは、シーボルトの著書が最初であろう。しかし、彼の研究は考古学が主であるから、日本人の形質についての詳しい記載はされなかつた。デーデルラインも同じドイツ人であるから、シーボルトの著書を読んでいただろうし、互いに意見を交したかも知れない。

ミルンはシーボルトとデーデルラインの説を引用しているので、それからヒントを得たと思われる。ミルンは日本人の起源に関心を抱いていたこともあって、日本人の顔貌に注意を払っていたのであろう。ミルンの貴族的タイプとデーデルラインの大島原住民とは、似ているが相違点もあり、デーデルラインは大島人はアイヌと似ていないと考えたのに対して、ミルンはアイヌと似ていることを強調している。^(七)

ミルンの日本人の二型をみると、わずか一〇行の記載であるが、ベルツの二型と非常によく似ていることがわかる。ベルツの薩摩型はミルンの原住民タイプ、長州型は貴族タイプに対応する。ミルンは人類学者ではないので、ベルツのように詳しい生体観察や生体計測などによって、自説を補強することはできなかつたが、鋭い直観と観察眼の持主であったということが出来る。

ミルンは明治一二年(一八七九)に九州旅行をして、阿蘇に登っているので、この調査旅行によって、日本人の二型の原形ができたことがうかがわれる。また、ベルツは同国人のデーデルラインから、大島住民についての知識を得たであろうし、ミルンの論文も読んでいたと思われる。そして、ベルツが計測の結果をまとめるに当って、ミルンらの考え方を取り入れた可能性は十分あり得ると推察される。

謝 辞 大分市えとう病院衛藤 龍先生の御助力に深謝の意を表します。

注

- (一) 原著を参照することができなかったので、次の翻訳によった。
エルウィン・v・ベルツ(池田次郎訳)「日本人の起源とその人種的要素」『論集日本文化の起源』五卷、平凡社、一三〇—一四二頁、東京、一九七三。
- (二) ヘンリー(ハインリッヒ)・フォン・シーボルト『考古説略』一八七九(斎藤 忠編『日本考古学史料集成』二卷、吉川弘文館、三五—六四頁、東京、一九七九。
- (三) Stebold, H.v.: "Notes on Japanese archaeology with especial reference to the stone age" C.Lévy, Yokohama, 1879.
(斎藤編、前掲書 二七—三〇三頁)
関 俊彦・関川雅子訳「先史・原史時代の日本——H・V・シーボルト著『日本考古学』——」『史誌』一六号、一一—一四二頁、一九八一。
- (四) Döderlein, L.H.P.: Liu-Kiu-Insel Amami Oshima. "Mittheilungen der Deutschen Gesellschaft für Natur- und Völkerkunde Ostasiens" Bd.3, Pt.23, S.103-117, Pt.24, S.140-156, 1881.
クライナー・ヨーゼフ、田畑千秋訳「琉球諸島の奄美大島」『沖縄文化研究』八卷、一一—一〇頁、一九八一。
- (五) Milne, J.: Notes on the Koro-Pok-Guru or pidwellers of Yezo and the Kurile Islands. "Transactions of the Asiatic Society of Japan", Vol.10, pp.187-198, 1882.

(六) アイヌの口碑に出てくる想像上の種族。ミルンは北千島アイヌを北海道アイヌとは別の種族と考え、それをコロボクグルとみなした。

(七) デーデルラインはアイヌの調査をしていないので、アイヌの写真と比較したと記している。それに対して、ミルンは奄美大島、琉球の調査を行っていないので、デーデルラインの報告に基いて論じている。

(愛知学院大学教養部)